

無責任な話だろう。

だが、孔明の性格等を考えると彼がその立場にいればそんな無責任なことをするはずがないのである。更に、劉備が蜀を制圧した時に、法正、孔明いずれも官位を授けられているが、法正が揚武將軍であるのに対し諸葛亮は軍師將軍だった。位的には、揚武將軍の方が上である。もし、諸葛亮が本当に参謀としての役割を果たしていたのならば、法正の下の位になるはずがない。

以上が諸葛亮の戦略家としての役割に疑問を感じた点である。

もしかすると、孔明は劉備生存中は戦略家、軍師としての役割を果たせる立場にいなかったのではないだろうか？

諸葛孔明について

高二一四 長澤 裕文

はじめに

諸葛亮孔明（以下孔明）は三国志で最も人気のある人物の一人である。しかし彼については演義での虚像や伝説などが入り混じっているため、どのような人物であったのかはよく分からない。まして近年は三国志ブームであり、新たな孔明像が沢山現れている。そこで本論では正史に沿って、まず第一章では孔明の人生について、次に第二章では孔明の人物評価を、そして第三章ではなぜ後世の人に孔明が慕われているのかについてを述べる事にする。

第一章 孔明の人生

生い立ち

孔明の幼少期についてはよく分からない事が多い。ただ、彼が徐州にいたところに曹操による徐州住民の虐殺があり、孔明がそれを見た可能性は十分にあり、それが彼に将来平和な世を取り戻すことを決心させたのかもしれない。そうでなかったとしても乱世が後の彼に影響した事は間違いの無いことだろう。

そして彼は徐州から荊州に移り住んだ。荊州は当時比較的安全な地域であり、大勢の学者等が移り住みいわゆる「名士」のグループが形成されていた。孔明はその中でも襄陽のグループに属していたようだが、友人も徐庶や崔州平等しか作らず、ほとんど隠者のような生活を送っていた。「臥竜」とまで呼ばれた彼の才能があれば、どこかの群雄に仕えれば大出世は間違いなかったはずなのに彼は誰にも仕えなかった。では孔明は隠棲生活を送りたかったのだろうか？いや、そんな事はないだろう。恐らく天下を統一できる群雄が時に残酷な行動も取るような曹操ぐらいしか見当たらず、とはいっても曹操は孔明の理想の君主とはかけ離れていたからだろう。彼はなるべく王道による統一をしたかったに違いない。きっといつかは自分の理想を実現してくれる人間が現れるという事を信じ、孔明は臥竜であり続けたのだろう。

劉備との出会い

そこに劉備が現れた。劉備は勢力こそないものの、彼の人徳は世に知れ渡っていた。また、中山靖王の末裔と自称しているだけとはいえ一応劉姓を持っているので、漢王朝再興の大儀を掲げることができる。孔明にとっては待ち望んだ人物であっただろう。しかし、そこでいきなり劉備に仕えなかった事を私は評価したい。劉備が「三顧の礼」を取るのを見てようやく仕えるという慎重さが孔明にあったから、後世に名を残す事ができたとも言えよう。

赤壁の戦いから蜀入りへ

劉表が死に、荊州に曹操が攻め込んできて劉備はまた安住の地を失った。この時期には孔明は主に裏方として動いている。赤壁の戦い前にはうまく孫権を動かして呉に劉備を受け入れさせることに成功した。演義で書かれているような派手な活躍ではないが、これは後の事も考えると重要なことであつたと思う。そして戦後に劉備が荊州南部四郡を奪取すると、孔明はそのうちの三郡を治めることになった。

そして劉備は益州を攻め取り、本拠地にする事にしたが、軍師にはほう統を伴い、孔明は荊州に残されたままであつた。このことから孔明が本来戦略家というよりはむしろ政治家であつたということが分かる。

なぜ夷陵の戦いを止めなかったのか

劉備が関羽の弔い合戦とはかりに呉への侵攻作戦を計画したとき多くの重臣たちが劉備を諫めたが孔明は何もしていない。この夷陵の戦いでは多くの蜀の将兵が死に、後の北伐にも大きな影響を与えるほどだった。なぜ孔明は止めようとしなかったのだろうか。その理由としては、いくつか考えられるので順に挙げていこうと思う。

①孔明の考えでは蜀には荊州が必要だった。

まず、当時の蜀の将兵たちには家族を残したまま蜀に来ている荊州出身者が多かったという事がある。彼らの家族の住む荊州は呉の領土となつてしまったため、将兵たちの荊州回復の願望は大きかつた。また蜀という国は劉備が荊州から多くの将兵を引き連れてきた関係で人口の割に兵士が多く非生産的で、かつ劉備と劉璋との戦争の間に土地が疲弊して生産力が低下していた。そういった理由で兵士を養うためにも荊州を取る必要があつた。さらに、益州は守るには易しいが攻めるのには難しい土地であり、中原に侵攻するためには足がかりとなる場所が必要だった。それが荊州であつた。

そして、荊州を回復するためには呉を攻めなければならず、関羽の敵討ちという大義名分を持った劉備が攻撃する必要があつた。

但しこれには疑問点もある。それは魏が呉を同時に攻めれば呉は恐らく滅びるか大きな痛手を受け、そうなれば蜀にとっては同盟する国がなくなり、蜀は魏に対抗できなくなってしまうのではないかという事だ。実際に曹丕に劉曄が献策している事もあり、曹丕がそのような策を取らないと読んでいたのかもしれないが、この点に関

しては再考が必要かもしれない。

②蜀の内政に専念しなかった

この時点での劉備はいささか正常な判断力を失っているため、孔明といえども諫めた結果左遷させられることになりかねない。当時の蜀はまだ劉備が乗っ取ってから日が浅く、また国力も回復していない。さらにまだ国内の動揺も収まっていない。劉備が戦いに多くの人材を連れて行ってしまいうのでとも人材のいない蜀本国にはあまり残っていない。そんな状況下で孔明が閑職に追いやられてしまえば、蜀の内政は大いに乱れるだろうし、反乱等が起きたときに対処の仕様がなない。孔明はそんな事も考えてあえて諫言せず、劉備が勝つか程々のところで講和して戻ってくることに期待したのかもされない。あれ程の大敗をするとは考えていなかったのではないだろうか。

③劉備の「義」には反対できなかった

劉備と関羽・張飛とは「義」で結ばれていたもので、孔明にはその間に立ち入ることができなかったのかもしれない。また劉備の行動には「義」が理由となることも多く、特にこの夷陵の戦いは拳兵以来の義弟である関羽の弔い合戦ということもあった。この戦いに反対する事は劉備を否定する事に等しい。そういった理由で孔明には反対する事はできなかったのかもしれない。

「君自ら取るべし」の意味

そして大敗後劉備は気落ちしてやがて白帝城で危篤に陥る。孔明が成都から駆けつけると劉備は孔明にこう言い残した。

もし嗣子輔くべくんばこれを輔けよ。もしそれ不才ならば君自ら取るべし(蜀志諸葛亮伝)

この解釈も古来よりいろいろ考えられているが、単にこれは劉備が孔明に対して劉禪を援けてやってほしいと言っているだけではないだろうか。劉備と孔明との間には通常の君臣関係を超えた信頼関係があり、劉備は劉禪が「不才」であっても孔明が蜀を「取る」事はないと思っあえて反語的に「君自ら取るべし」と言い残したのではないか。まさかこれをそのままに解釈することはできないだろう。

南蛮征伐

そもそも蜀という国は劉備というカリスマで成り立っていたという事もあり、劉備の死後、背後で呉が支援する南方の異民族が反乱を起こした。このまま北伐を開始しては北では魏、南では異民族への二方面作戦になってしまうため、孔明は南蛮征伐を開始した。もともと異民族と蜀軍とは兵士の数も装備の質も違うので、先の夷陵の戦いで多くの精兵を失っている蜀にとっては北伐に向けた新兵の訓練の意味合いも考えられる。南蛮征伐にはその他にも異民族を帰服させることで異民族からの徴税を可能にして戦費を調達する事や人口の少ない蜀にとっては不足がちな兵士を異民族から徴兵するなど、他にも色々北伐に向けた意味があったのかもしれない。

孔明はただ勝つだけでなく異民族の心を掌握することも考えたので、彼が生きている間大規模な反乱が南で起きることはなかった。今でも雲南省などには孔明に関するものがたくさん残っており、孔

明が当時の異民族の人々に慕われていたことが分かる。

出師の表

そして南方の憂いを無くした孔明は北伐に取り掛かる。彼は上奏文である「出師の表」を書く。これは北伐に向けた意思表明であると共に、劉禪を戒める意味合いもあったと考えられる。

北伐の意図とは

そしてとうとう孔明は北伐を開始する。では北伐はどのような意図の下で行われたものだろうか。北伐の理由としては、

- ① 名目通りに魏を討つ
- ② 魏を攻めることによって蜀を守る

③ 劉備の遺志を継ぎ、漢王朝の再興を図る

の三点が考えられる。これらを順に詳しく考えていくこととする。なお、便宜的に第一次・第二次を前期北伐、第三次から第五次を後期北伐と呼ぶ事にする。

まず当然①が考えられる。前期北伐は第一次では要衝街亭を押さえて涼州以西を切り離そうとした。涼州以西を帰服させることができれば羌族などの勇猛な異民族を騎馬隊として徴用する事ができるので魏に圧力をかけることができる。しかし街亭の確保に失敗し、第二次では陳倉道からの突破を図って、結局陳倉城を落とすことができずに撤退と、戦略上の変更を迫られる事となった。

そこで後期北伐では前期北伐に比べてさらに持久戦色が濃くなっていく。第三次北伐では武都・陰平の二郡を獲得したが、この二郡

はそれほど重要な拠点という訳でもない。また第五次では屯田すら始めた。しかし魏を滅ぼす前に過労で孔明の寿命が先に尽きるのがある意味では当たり前であったように思われる。また、魏を攻めるのは相当に難しいことである。後に姜維が北伐を繰り返しているが、ただ蜀の国力を消耗させるだけであって、何も意味がなかったことも参考にしなければならぬだろう。よって孔明は魏を攻めることしか考えていなかった訳ではないと思われる。

次に②であるが、意外にも少なくとも第三次以降はこちらの意味合いの方が強いようだ。まさに「惟だ座して亡ぶるを待たんよりは、之を伐つにいざれぞ（後出師の表より）」の考え方の通りであると思われる。蜀が天険をもって魏の攻勢をしのごうとしても、ただ無策のままに過ごせば両国の国力の差は明らかであり、やがては魏に攻められて滅亡してしまうだろう。魏を牽制しつつ、国力の増強に努める必要が蜀にはあったのだ。蜀軍が仕掛けなかったのは自軍の人数の少なさにも理由があるが、魏軍を引きつけておくだけで作戦として成功だったからかもしれない。

最後に③であるが、孔明は理想家ではないからこれだけで動いていた訳ではないだろうが、とは言っても彼も人間であるから自分を見出してくれた劉備の夢である漢王朝復興を実現しようとしたのかもしれない。

第二章 孔明の人物評価

孔明は「軍師」としてどうだったか

孔明が軍権を得たのが劉備死後という事もあって、いわゆる「軍師」としての孔明を評価するのは事実上北伐からのみ可能である。北伐を見ると、孔明は陳倉で城攻めに手こずり、毎回北伐の最期には兵糧が欠乏して撤退したりするなど様々な問題点を露呈している。だが、孔明は戦略の上を常に見ていた。蜀という国家の存続である。中原の大国魏から見れば蜀は天険に頼る地方政権に過ぎない。多少局所的に負けた所でたいした被害にはならない。だが蜀は魏と同数の死者が出るだけで大損害である。蜀という国が生き残るためには最低限負けない事が必要である。そのためには魅力的ではあるが危険な奇襲策（魏延の猷策など）は取る訳にはいかないし、必然的に魏との大規模衝突もなくなる。当然ながら勝つことは至難である。

だから、北伐で華々しい勝利を飾れなかったからといって孔明を非難することは誤りである。むしろ大敗しなかった（街亭は直接孔明が指揮を取った訳ではないから除く）ことを評価すべきである。

孔明は丞相としてはどうだったのか

あくまで孔明は本来内政が本職であると思われる。蜀建国以前は呉との同盟に一役買ったたり、荊州を治めたりした。蜀に入ってから荒れた蜀の復興に努め、金銀山開発や特産の蜀錦の増産もした。

特に蜀錦は卑弥呼に魏が与えた絹がそうであったときさえ言われるほどに流通したという。異民族を武力ではなく彼らの心を掌握することで兵士の挑発や税金の徴収も可能にした。北伐中は漢中と成都にそれぞれ政府を置き、陣中でも政務を取った。

孔明は法治と徳治をバランスよく採用して政治を執ったという。孔明の刑罰は厳しく、寥立や李厳といった重臣に対しても重く罰するほどであったが、人々は孔明の裁きが公平であったため不平は言わなかった。漢中に駐在する兵士の五分の一を一年ごとに交代させその制度は魏が侵攻してくる危険性があったときでも守られた。

孔明の存命中はよく蜀は治まっており、優秀な丞相であったと言えよう。

孔明は人間としてどうだったのか

孔明は清廉潔白な人物であった。彼の死後に残ったものに財産らしい財産は無かったという。また彼は他人にも厳しいが自分にも厳しい人物であった。思うに孔明には他人の優れた能力を見出す力があったと思う。しかしながら長所を重んじるあまりに他人の欠点を見すごしたのではないだろうか。人材が少ない事もあったが、孔明には人選ミスが多い。やはり孔明は一番上に立つ存在ではなく、誰かの補佐に回って二番目の地位にいるのが向いていてのではないだろうか。

なお、孔明は木牛・流馬の発明や連弩の改良などを行っているが、当時そういったことは地位の低いものがやることであった。魏にも馬均という発明家だったが、地位は低いままだった。このような当

時軽く見られていた堯明というものを重要視して、自ら行うという事も彼の先進性を表している。

なぜ孔明は人々に人気があるのか

後世において神格化されるほどに人気のある孔明であるが、ではなぜそんなに人気があるのだろうか。もちろん彼の能力の高さもあつたろうが、例えば彼のライバルであつた司馬懿は後の晋王朝創立の礎を築くなど優れた能力を持ちながらも人気は無い。こういった違いはどこから来るものなのだろうか。

一つには判官びいきのようなものがある。孔明は三国の中で最も弱い蜀で最も強い魏を討とうとした。人材は乏しく、兵力は魏の数分の一にも満たない。それで魏を討つなどという事はほとんど不可能に近い。しかも志半ばに陣没してしまう。その悲劇性も理由の一つではないか。

もう一つは孔明の「忠」の心である。劉備から受けた恩を忘れずに、自分の身を犠牲にしてまで北伐を続ける。暗愚ではないにせよ有能ではない劉禪を、遺言どおり支え続ける。そんな事はなかなかできた事ではない。

そして事実上不可能になつた「魏を討つ」という事を最後までやり通したことも重要である。孔明は途中であきらめて投げ出すことをしなかつた。残りの人生を全て北伐にささげた。

このような普通の人間には到底成し得ないことを成し遂げたからこそ、孔明は皆の理想となり、尊敬を集めることができたのだろう。

あとがき

三国志は好きではありませんでしたが、一人の人物について掘り下げるという事をした事はありませんでした。広く浅く知るのもいいけれども、狭く深く知るのもまた良いと思えました。もしこの特別授業がなければ、こんな体験は恐らくできなかったでしょう。この場を借りてお世話になつた全ての方にお礼申し上げます。どうもありがとうございました。